列座の人人に向って古風な調子で歌いかけている。桜花は娘子らや遊士によってかざしとされ、かずらとされた吉祥の花であったし、古事記などで見れば椿も賀の意をみちびくために提示される習慣であったことがわかる。思いがけない連想から出たように見えても、このようにしてこれらの花の開朗な趣致に寄せる祝福の心が「…今日ぞ。わが夫子、花蔓せよ」といった、はずんだ、閑雅な心境の表白にのびる筋みちは、おのずから考えられるのである。

家持の歌にみえる花蔓は、すでに持統紀にいう花縵あたりからは独立した意義・内容を見出してきていることが知られる。そこには、いかにも奈良時代のものらしい、のどかな遊楽意識と鑑賞的な生活気分をたたえて来ている。しかしそれにもかかわらず、右に見たような桜花の信仰との脈絡のたどるべきものを存するのである。この作者に

桜花今盛なり難波の海おし照る宮に聞しめすなへ（四三六一）

の作のあるのも、そのことを語る。すなわち、難波の宮を讃えるのに水辺の桜を叙してその繁栄を象徴させるゆき方は、讃歌における伝統の規格に沿うものであった。いわゆる万葉第四期の、人麿・赤人の時代への回顧的な心情の感傷的な詠歎に流れ、理智的・技巧的・遊戯的な詠風にかたむいていった中にあって、家持の作品が一種の新風をはらみながら展開したことは贅するまでもないが、家持作品の文芸質を考える上で、それらの作の多くがなお、かような古い信仰印象を存する点は見落されてはならないであろう。

註一　古今和歌集通解五頁
二　窪田空穂氏、古今和歌集評釈下巻、七六四頁
三　折口信夫全集第三巻「はちまきの話」
四　同右
五　日本古典文学大系日本書紀上、四五三頁頭註
六　折口信夫全集第十七巻「雛祭りとお彼岸」

「須賀の荒野」について

江野沢淑子

一

従来、万葉集第十四は、その内容形式が民謡的なところから、漠然と東国の民謡集と考えられてきたが、故武田祐吉氏が、その著

『上代国文学の研究』で、「東歌を疑ふ」の標題のもとに、東歌の多くは、大和人の歌であるという説をかかげられた。この説をめぐって、土居光知氏や森本治吉氏が反対説を唱えられ、現在では東国の民謡集ということに落着いたのであるが、武田氏が疑われたのも、巻十四には、問題点があるからであろう。武田氏が「東歌を疑ふ」に示された主な論点は

(1)土着人である東国人の作にしては地名をよみ入れすぎるとの説。

(2)歌の内容から見て、東国人の野趣と生気に乏しいゆえ、西方人の作とする説。

(3)東歌が東国の国風としては、短歌形式に整いすぎるとの説。

等であった。とくに(1)については、武田氏によれば東歌二百三十首のうち、百四十首が地名を含んでいる。「もともと地理観念に疎い古代の地方人がおのがすむ地を特に提示する必要があったにしても、なほ他の諸国と区別して（信濃なる須賀の荒野、信濃なる千曲の川といふ如くに）かの信濃の国にあるといふ冠辞を附する事は絶対にない」（『上代国文学の研究』）と言われ、さらに上つ毛野を第一句とする数首の歌を作ったのも、京から赴任した官人が東人の口ぶりのまね、あるいは東国の地名風物をとり入れてなしたよい例であると説いておられる。

以上に対して、わたしは次のように思う。なるほど、武田氏の説のように、万葉集廿巻を通じて、地名よみこみの歌は旅行の作に最も多いのは事実であるが、これは万葉集が土着人ならぬ西方人の手によって作られたところから生じる当然の現象であって、武田氏のように、万葉集巻第十四中の地名よみこみの歌と他巻のそれとの比較から結論を出すのは少しく無理ではあるまいか。むしろ、巻第十四がなぜ、多くの地名をよみこんだかを考察することが先決なのではあるまいか。これに関しては、土居氏は「お国自慢、名物自慢から或は久しく慣れた土地に対して、慣習に対してなつかしむ余り、地名や風習をよむのが非常に多い」（『文学序説』）と述べておられるが、後世の民謡に表われた事実から見ても、土居氏のいうように、愛郷心の発露として地名をよみこんだのであろう。

さて、万葉集研究が特に盛んになったのは江戸時代からで、幾多のすぐれた註釈書や研究書が上梓された。それらの中で、万葉集巻第十四の歌中、西方人の作かと指摘されつづけてきた一首がある。それが、

信濃奈流須賀能安良能爾保登等芸須奈久許恵伎気婆登伎須疑爾家里（三三五二）

信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く声きけば時すぎにけり（新訓万葉集による）

である。

二

この歌を旅にある西方人の歌と推定したのは賀茂真淵の『万葉考』が初めであり、「旅に在てとく帰らんことを思ふにほととぎすの鳴まで猶在をうれへたるすがたも想も、京人の任などにてよめりけん」。と述べ、橘千蔭の『万葉集略解』もほぼ同説である。賀茂真淵はこの歌に注目したらしく、次のような和歌を作り、後人から、万葉ぶりの歌と目された。

信濃なる菅の荒野をとぶわしのつばさもたわわに吹く嵐かな

右の和歌の本（もと）は三三五二の歌であった。

また、この三三五二の歌は、歌として古くから人口にものぼったらしく、二十一代集中、十一代にあたる、続後拾遺和歌集の二二〇に、助詞一字だけがちがい、あとはすっかり同じという歌が所載されている。なお、続後拾遺和歌集の歌数は千三百四十七首、二十巻から成る。正中二年（一三二五年）、南北朝時代の成立である。また同集の読人しらずの歌中に、万葉集所載の歌が七首あり、その中の一首が、二二〇の歌である。すなわち、

題しらず　　読人しらず

信濃なるすがのあら野の時鳥鳴く声聞けば時過ぎにけり

この歌の前に「五月雨のふるの神杉過ぎがてに木だかく名のる時鳥かな」（前中納言定家）「時鳥行方もしらぬ一声にこころそらなる五月やみかな」（祐子内親王家紀伊）「をちかへり鳴けや五月の郭公やみのうつつの道惑ふがに」（常磐井入道前太政大臣）「鳴けや猶おのが五月の郭公誰ゆゑならぬ夜半の寝覚を」（忠良）「今はとて声も忍ばずほととぎすたれに別れを惜しむなるらむ」（読人しらず）とほととぎすを詠んだ歌が五首並んでいる。二二〇の歌を含めた六首の歌の情趣は、鎌倉時代特有のものがなしい悲哀感が漂っており、平安時代にほととぎすをよんだ歌、たとえば、「わが宿の池の藤波咲きにけり山ほととぎすいつか来鳴かむ」などの歌に見る、優雅さ・風流などとは全く質を異にしている。まして万葉集の情緒とは全く異質である。それにもかかわらず、万葉集第十四の「信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く声きけば時すぎにけり」の歌が載っているのは、この歌のもつ、どこか優しい調べが後世の人の心をとらえたのではあるまいか。

そのもの優しい調べは、結句の「時すぎにけり」にあるとわたしは思う。「けり」は①過去（回想）②詠嘆をあらわす助動詞であることは周知の通りだが、最近、竹岡氏は「あなたなる場の美称としての叙述」（『言語と文芸』31号）と主張しておられる。多くの用語がそうであるが、時代と作者によって、用法が異なる。万葉集中、「動詞の連用形＋に＋けり」型を持っているのが、わたしの調査によると、短歌では、四十一首あり、内訳は作者判明歌二十三首、作者未詳歌十八首である。作者判明歌の中には、家持の歌十三首、笠女郎、高市黒人の歌が二首ずつ含まれている。巻第十四の歌として、作者未詳ではあるけれども、「時過ぎにけり」の調べは、野の調べというよりも、都風といえるのではなかろうか。

三

さて、三三五三の歌には三つの問題点があると思う。

(1)「時すぎにけり」の時の解釈・時の設定。

(2)万葉集中の「ほととぎす」の位置。

(3)「須賀の荒野」について、

であるが、(3)「須賀の荒野」について、私見を述べて見ようと思う。それに先だって、本題とも関係があるので、(1)「時すぎにけりの「時」についての諸説を記す。

A京人の帰るべき時。『万葉考』『万葉略解』『万葉集全釈』―歌調が雅麗で毫も東歌らしい香がないこと、地方人が自ら信濃なるすかの荒野というはずのないことなどから、京人の歌にして帰るべき時期のおくれたるを驚いたもの。

B契りし時。『万葉集古義』―夏来て郭公鳥の音に驚きて、彼が鳴

くを問ば、契ぎりし時はや過ぎにけりと云へるなり、

C農耕の時。『万葉集総釈』―旅人の歌。鳥と農事との関係を深く考えていた時代の人が、ほととぎすがなくと行なわねばならぬ田の為事を思い出した。そうすれば、「時過ぎにけり」は、深い抒情的な驚きでなくなる。単に田行事の時が過ぎた、すぐ着手しようという位になってしまう。『万葉集代匠記』『万葉集評釈』もだいたい同じ。

D恋愛詩としての民謡。『万葉集私注』―旅行者の歌でなく、信濃の地に行われた民謡。会うべき時が過ぎ、会う機会が失われた恋愛詩。

E農耕の時ではない「時」。『万葉の伝統』―ほととぎすは万葉集中最も多く歌に詠まれている鳥であり、題詞中のものを除き百十六首という多数の歌に詠まれ、第二位の雁（中西悟堂氏によれば六十三首）の約二倍半を占めて断然他を圧し、家持によって詠まれた六十三首を除くとしても、万葉集第二期の初頭から四期にかけて多くの歌人に詠まれてゐるにもかかはらず、直接農耕や農耕の時節との関連において詠まれたと見るべき歌が他に殆んど一首も無く、殊に東歌や防人歌には今問題としてゐる一首を除き、全然見出されないといふ事実は、すくなくとも万葉集の実例について見るかぎり、今の歌のばあひだけ、これを農耕の時節にかけて解しようとすることは、実証的根拠をもたない説であるということになるかと思ふ。―この説に対して『万葉集注釈』も「穏当な説として聞くべき」と述べている。

以上が主な「時」についての解釈であるが、万葉集巻第十四には、「時」の意味の東国方言「之太」シダを用いている歌がある。三五一五と三五二〇と三四六一の三首である。他の東歌が時を表わすのに「シダ」を用いているに対し、この歌のみ、「時」を用いていることにも、注目すべきであろう。

さて、「須賀の荒野」であるが、「須賀」という地名について、『万葉代匠記』以来、和名抄所載の「信濃国筑摩郡宗賀郡曽加」とされてきた。『大日本地名辞典』に、「犀川と楢井川との間なる広野とす…」とあり、更に『国史辞典』四には「信濃国筑摩郡。犀川上流の灌域を占め、いはゆる松本平の南半を基調としてたてたものである。……宗賀郷は塩尻町これに当る。同地の字小曽野は即ち遺名であらう。延喜式の阿礼神社も亦この地方に坐してゐる。…信濃の国府は松本市、筑摩・深志の地域にあたる」と記されている。以上から見ると、須賀は、和名抄のいう宗賀郷でその地に延喜式所載の阿礼神社が存したことは、昔はこの地が相当開けていたことを意味するのであろうし、信濃の国府と近かったことは、この歌が西方人と関係のある歌といえるかもしれない。以上のように考えてきたが、私には宗賀を須賀ときめかねる、多くの疑点が残った。それは次の諸点である。

(1)信濃の国には二箇所に国府があったという事実。一は松本の深志。今一つは上田市の近く。上田市神川の国分には国分寺があり、その遺構の発掘が行なわれたこともあり、条里制上では二つの国府の存在が認められている。同時代に、信濃と同様に、一国で二つの国府を持っていたのは、伊勢国で、上野と鈴鹿に国府があった。国府は大宝律令で駅路の制が布かれたころから置かれ、交通に利便のあるところが国府になった。では、上田市近辺で立

地条件が宗賀に似ていて、荒野はないだろうか。

(2)連歌師宗長のいう「すがのあらの」とはどこだろうか。『群書類従』雑部に、宗長が越後国府（今の直江津）に師の宗祇を訪ね、帰ってくる途中、「菅のあら野」を通っているが、それと関係あるのではないか。

(3)信濃国は、北信と南信とに分けて論じられるが、その場合、万葉集より百年余り、後に出た和名抄や延喜式に記載されている神社や郷はどちらに多いか。また、万葉集の信濃関係の歌は、どの方面のが多いか。

(4)松本および上田に至る道はどうであろうか。作者がもし西方人であるとしたら、それらの道は官人に関係のあるところか。

(5)信濃の国府であった松本の近くの宗賀郷が「須賀」であるならば、三三五二のいう「須賀の荒野」の荒野はどこであろうか。信濃国国府は、楢井川左岸の島立村—今の朝日村—あたりらしいし、宗賀が塩尻町とすると、いずれも盆地に近く、荒野という印象は薄いのではないか。

以上の疑点を分析して、「須賀の荒野」を考えてみたいと思う。

四

(1)信濃国に二つの国府があった理由を和名抄の郷名により考察すると、南信の松本、北信の上田、ともに当時の交通の要衝であったためであろう。信濃国の官道は延喜式に「信濃国駅馬阿知三十疋、育良（いから）・賢錐（かたきり）・宮田・深沢（みさわ）覚志（かくし）・各十疋、錦織・浦野各十五疋、亘理・清水各十疋、長倉十五疋、麻績・亘理・多古・沼辺各五疋、伝馬伊那十疋、諏訪・筑摩・小県・佐久郡各五疋」と載っている。阿知駅（現在、下伊那郡）が信濃国の首駅で、阿知駅→御坂峠→育良・（現在、飯田市）→賢錐駅（現在、上伊邦郡）→宮田駅（同上）→深沢駅（現在、諏訪市）→覚志駅（現在、塩尻市）→（国府）→錦織駅（現在、東筑摩郡）→ここで官道は二つに分れ、一は北方の麻績駅、一は東方の浦野駅に至る。東の官道は、浦野駅（現在、小県郡）→千曲川→清水駅（現在小諸市）→浅間山麓→長倉（現在、軽井沢町）→碓氷峠→上野国坂本にゆく道である。いま一方の北の官道は、麻績駅（現在、東筑摩郡）→犀川→善光寺→多古駅（現在、上水内郡）→沼辺駅（野尻湖の西岸）→越後の国府に至るのである。

また、信濃国は上代におけるわが国第一の馬産地であった。左馬寮の御の牧数が、甲斐と武蔵が四、上野が九であるに対して、信濃の御牧は十六ケ所あった。また、年貢御馬も武蔵と上野とが五十疋であるのに対して、信濃は八十疋である。御牧も旧記によれば、南信に十四ケ所、北信に十五ケ所、名前を見る。南信では諏訪郡と伊那郡に多く、国府のあった筑摩郡には三ケ所、御牧があった。特記すべきことは、筑摩郡の山家郷から、上田近辺の国分寺に通ずる交通路が存在したことである。北信では、高井郡・小県郡・佐久郡に多く御牧があった。

以上で南信も北信も当時、駅として、御牧の所在地として栄えていたことが分るが、今一つ、北信が上田近辺を中心にして栄えていた実例を提げよう。

即ち、延喜式の完成した延喜二十七年（九二七）や和名抄が完成した承平四年（九三四）ごろと同時代に、天慶の乱があった。関東平氏の平将門が一族と私闘し、さらに関東諸国の土豪と戦い、遂に

天慶三年（九四〇）平貞盛によって平定された戦である。将門記によると、…この戦は承平五年（九三五）より始まり、天慶三年に戦の終結をむかえた。その間、五年間である。この戦について信濃国と関係のあることとしては、承平八年（九三八）二月の戦が信濃国国分寺附近で行なわれたことである。平将門の戦の経過を見ると、常陸国府を襲撃したり（天慶二年十一月）、下野国府、上野国府と武蔵国府を占領しているのが、いずれも天慶二年十二月なのである。こういう点から見ると、当時の要衝の地は交通網が開け、道路もついていたと思われる。先にあげた信濃国分寺附近の戦いのあった翌月には、常陸国府を襲撃している。常陸国府は現在の石岡町にあたり、上田附近と石岡町との間をおたけびをあげて往還した武士団の姿が想像される。

次に、上田市近辺で、地名と立地条件が宗賀に似ているところとしては、上田市よりバスで約一時間十五分、奥まったところにある長野県小県郡真田町菅平（ちいさあがたぐんさなだまちすがだいら）を想定する。上信越高原国定公園の南西に位し、海抜一三二〇メートル、南北十二キロメートル、東西二十キロメートルにわたる高原である。根子岳（ねこだけ）（二一九四メートル）と上信国境にある四阿山（あずまやさん）（二三三三メートル）にかこまれ、ここは上州の妙義山・碓氷峠とともに古来よりカッコウ、ホトトギスの名所でもある。また、四阿山の山頂より信濃側に下った里宮に延喜式内社の山家神社があり、和名抄所載の山家郷も、この地、すなわち、現在の菅平内にあった。なお、国分寺跡附近を流れる神川の上流（北）に山家神社、山家郷があるのも注目すべきことでなかろうか。

さらに菅平は非常に古いといわれる無土器文化期の石器が、赤褐色ローム層から出土したり、沖積期の黒色堆積土から多くの土器、石器が出土している。また、現在、大明神沢とよぶ、水清い沢の奥に先住民族の洞穴遺跡があることなどから、菅平一帯に古くから人跡があったことが知られる。「スガダイラ」という地名は宝永三年（一七〇五年）甲石之郷指出帳に「菅平」と見えるが、古くから「菅平」もしくは「沼平」といったらしい。ともあれ、「スガ」という地名は農事、あるいは農耕を連想させる地名である。

(2)連歌師宗長の記した『宗祇終焉記』に、「信濃路にかかり、ちくま河の石ふみわたり、菅のあら野をしのぎて、廿六日というに草津という所につきぬ。おなじき国に伊香ほといふ名所の湯あり。中風のためによしなど聞きて、宗祇はそなたにおもむきて二かたになりぬ。……」とあるが、このコースについては、田子檀氏が「高井側から菅平に出、鳥居峠を越していたことが確実」と述べられているが、即ち、長野県から群馬県に抜けていったのである。廿六日とは前後から推して、文亀二年（一五〇二年）二月ということが判明するので、万葉集巻第十四の三三五二の歌と助詞一字違う和歌の所載された『続後拾遺和歌集』の成立より、約二二〇年後であることがわかる。宗長はたしかに菅平あたりを通っているし、その二百年前に詠まれた「すがのあら野」もおそらくはこの辺をさすのではあるまいか。スガダイラ一帯は、まことに荒野というふうにふさわしい土地である。

(3)信濃国には古来十郡あり、うち南の、伊那郡・諏訪郡・筑摩郡・安曇郡を南信と称し、北に位する更級郡・水内郡・高井郡・埴科郡小県郡・佐久郡を南信と称する。延喜式所載の神社数と、和名抄所

載の郷数を比較すると、南信は、九座、二十二郷。北信は三十九座四十五郷で、北信の方が神社数、郷数ともにはるかに多い。これは何を意味するのであろうか。北信の方が当時の文化圏内に多く入っていた証拠であろうし、隣国上野国との関係も一考すべきであろう。また、国名の判明している信濃関係の万葉集の歌も北信側のそれが多いようである。参考のために北信側の歌をあげると、

信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く声きけば時すぎにけり（三三五二）

人みなの言は絶ゆとも埴科の石井の手児が言な絶えそね（三三九八）

信濃なる筑摩の河の細石も君し踏みては玉と拾はむ（三四〇〇）

中麻奈に浮き居る船の漕ぎ出なば逢ふこと難し今日にしあらずば（三四〇一）

（中麻奈は①水内郡中俣　②川中島　③和名抄の童女すなわち小県郡海野説あり）　以上万葉集巻第十四

から衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ来のや母なしにして

国造丁小県郡他田舎人大島

ちはやぶる神の御坂に幣奉り斎ふいのちは母父が為（四四〇二）

主帳埴科郡神人部子忍男

(4)信濃官道について(1)に述べたので、今一つの国府上田附近を和名抄から考察すると、上田市を流れる千曲川の右岸に須波郷があり、その東南四キロの神川の流域に国分寺の遺構がある。この神川を遡ると、山家郷があり、延喜式の山家神社が大字真田に存する。先にのべた童女（おむな）郷も千曲川の右岸に接し、上田から遠からぬ海野に当る。以上から見ても上田は国府にふさわしく、往時の有名寺社と郷を周辺にもっていたといえよう。

(5)現在、菅平の地は日本のダボスと呼ばれ、晴れた日は空がぬけるほど青い。二千メートル以上ある山々に囲まれながらも、土地が高いせいか、なだらかなスロープをなしていてまことに広漠たる野にふさわしいたたずまいである。荒野とはそういう地を呼ぶのではなかろうか。スガの荒野といい、スガダイラといい、地形上からも関連性が強い。さらに、山家神社の存する四阿山の上州側から、信州側への順路として、日本武尊ご東征のさいの入信の道すじを諸記録などから考えてみると、次のようになる。すなわち、常陸→武蔵→甲斐→秩父→上野国→碓日坂→佐久平→吾妻川→上信国境鳥居峠（山家神社の奥宮がある）→（上信一帯に日本武尊を祀った神社が多い）→四阿山→菅平→東筑摩である。

五

(1)から(5)までの理由から、わたしは「須賀の荒野」を菅平あたりか、一歩譲って、従来の南信の宗賀でなくて、北信の小県郡あたりと考えたい。この考察をより裏づけるために上、上野国についてふれたいのであるが、紙数の関係で今は省く。しかし、上野国は景行天皇の御代、日本武尊が大伴武日を伴なって東征された時から、上野および信濃文化圏に多くの影響を与えたことは見逃せない事実であろう。（昭和四五・九・三十）